

地域における障がい者スポーツの振興をテーマとした PBL 型授業の実践報告*

内藤 景^{*1}, 辻本 典央^{*1}

Practical Report in Project-Based Learning about Promotion of Para-Sports in Fukui

Hikari NAITO^{*1} and Norio TSUJIMOTO^{*1}

^{*1} Faculty of Sports and Health Sciences, Department of Sports and Health Sciences

This report summarized one of the content of the PBL (project-based learning)-style seminar that the Sports and Health Science Department is working on. The theme of our PBL seminar is “Promotion of para-sports in Fukui”. Specifically, seminar was conducted in the following four stages. First, students conducted preliminary survey for the history and rules of para-sports to deepen understanding about para-sports. Second, students and teachers participated in the flying disc game of the 7th Fukui para-sports event to assist in the event. Third, after participating in the event, students discussed the strengths and improvement point of the event on the basis of three perspectives: (1) playing, (2) watching, and (3) supporting. Fourth, they made slides for presentation while considering that they would be in charge of the event the following year. Afterward, students made presentations to staff of the “happy fukui sports association”. In such PBL-style seminars for promotion of para-sports, the students could learn perspectives to hold para-sports event and get presentation skills. Future seminar is required on creating a program that students take the initiative in planning new para-sports promotion event.

Key Words : Project-Based-Learning, Para-Sports, Flying Disc, Regional Activation

1. 緒 言

PBL (Project-Based Learning) 型授業は、アクティブラーニングの中でも最も学習者の能動性・主体性が求められる授業形態であり⁽¹⁾, 大学教育において盛んに実践が行われている。福井工業大学においても、平成 27 年度に始まった 3 学部体制を期に、全学部で PBL 型の演習科目が設定され、平成 28 年度より本格的に実施されており、その学習内容や取り組みが報告されている⁽²⁾。

福井工業大学スポーツ健康科学部では、PBL 型授業として、「地域活性演習基礎 (必修科目)」が 2 年生後期に実施され、PBL 型授業に取り組むための基礎力を学習する。そして、その身につけた基礎力を応用する PBL 型授業として、「地域活性演習 I・II・III (選択科目)」が 3 年生以降のカリキュラムに組み込まれている。「地域活性演習基礎」は必修科目のため、必ずしも全員が意欲的にプロジェクトに参加しているとはいえない状態から学習がスタートするが⁽²⁾, 「地域活性演習 I・II・III」の特徴は、スポーツ健康科学部の教員が、地域の活性化に関わる独自のプロジェクトを立ち上げ、それらのプロジェクトに対して興味をもった学生が自主的に受講する点であり、学習者の能動性・主体性が求められる PBL 型授業の目的により近づいた発展的な学習となっている。

筆者のプロジェクトグループでは、「地域における障がい者スポーツの振興」をテーマとして、地域活性演習 I を実践した。そこで本報告では、授業内で取り組んだ学習内容、成績の評価方法、学習によって得られた教育成果、そして今後の PBL 型授業の課題について報告する。

* 原稿受付 2018 年 2 月 27 日

^{*1} スポーツ健康科学部 スポーツ健康科学科
E-mail: hnaito@fukui-ut.ac.jp

2. 授業の目的と実施概要

福井工業大学スポーツ健康科学部では、PBL 型授業として、「地域活性演習 I（選択科目）」が 3 年生前期のカリキュラムに組み込まれている。Table1 は、地域活性演習 I の授業の目的と学習到達目標、筆者のプロジェクトグループにおける各回の授業計画と、各回が PDCA サイクルのどの部分に該当するかを示している。

「地域活性演習 I」の特徴は、選択科目であるため、教員が設定したテーマに対して興味関心をもつ学生が履修する点である。筆者のプロジェクトを受講した学生は、スポーツ健康科学科の学生 3 名で、2 名の教員が学生たちの活動をサポートする形で実施した。筆者のグループでは、「地域における障がい者スポーツの振興を考える」をテーマとして設定し、この課題解決のために「しあわせ福井スポーツ協会」と連携をとりながら授業を実施した。「しあわせ福井スポーツ協会」は、福井県における障がい者スポーツの振興を図るとともに、障がい者福祉の向上に寄与することを目的として設立された団体であり、本プロジェクトを実行する上で適任であると判断した。

授業の展開は、PDCA サイクルの流れに基づき、計画期、実施期、確認期、見直し・改善期の 4 期間に分けて実施した。計画期では障がい者スポーツの地域振興を考える動機付けを行うため、「障がい者スポーツの歴史や現状」を事前に調査し、学生相互にその成果報告を行った。実施期では、福井県障がい者スポーツ大会フライングディスク競技の運営スタッフとして活動した。確認期では、障がい者スポーツ大会フライングディスク競技の運営に関わる問題点をブレインストーミングおよび KJ 法を用いて学生間で協議した。見直し・改善期では、次年度に自分たちがイベント運営に関わることを想定して改善案を協議した。また、その改善案を提案するプレゼン資料を作成するとともに、福井県障がい者スポーツ大会の主催者である、「しあわせ福井スポーツ協会」の職員の方々に向けて成果報告会を行った。

3. 授業の具体的な展開について

3.1 計画期

計画期（PLAN）に該当したのは第 1 回から第 4 回であった。第 1 回の授業ガイダンスでは、教員が学生に対して授業全体のスケジュール確認を行い、プロジェクトの課題に関して説明を行った。第 2 回と第 3 回では、学生たちに日本における障がい者スポーツの現状を理解させるため、「全国障がい者スポーツ大会について」、「日本における障がい者スポーツ振興について」、「障がい者スポーツにおける指導上の留意点について」という 3 つのテーマに関して Web 等を用いて事前調査を行い、その調査報告の発表資料準備を実施した。第 4 回ではパワーポイントを用いて調査報告の個人発表と、発表内容に関する議論を行った。

3.2 実施期

実施期（DO）に該当したのは第 5 回から第 8 回であった。学生が運営スタッフとして参加したスポーツイベントは、しあわせ福井スポーツ協会が主管で、平成 29 年 6 月 4 日に開催された「第 7 回福井県障がい者スポーツ大会フライングディスク競技」であった。この大会は、「スポーツを通じた障がい者の自立と社会参加の促進に寄与し、障がい者に対する社会意識の啓発、障がい者スポーツの発展を図ること」を目的として開催されており、プロジェクトテーマに対して最適なスポーツイベントであると考え設定した。本来であれば、PBL 型学習ではイベントの PLAN 段階から、学生が主体的に準備を行い、計画したイベントを実行へ移すことが望ましい⁽¹⁾といわれている。しかし、障がい者スポーツの指導に対する知識と経験が不足している学生たちが、PLAN 段階から新しいスポーツイベントを計画していくことが困難であると考えられたため、事前に準備が進められている既存のスポーツイベントを活用することで、CHECK、ACT の段階を重視した授業進行に努めることとした。

地域のスポーツイベントを活用した PBL 型学習を实践した横谷ほか⁽²⁾が指摘する視察の観点を参考にし、学生たちには、「する：イベントの参加者としての目線でイベントに関わる」、「見る：観客としての目線でイベントを観察する」、「支える：イベントの主催者としての目線で大会運営や PR 方法を観察する」という 3 つの立場を意識した上で、イベントへ参加するよう指示を行った。

Table 1 The purpose of Regional Revitalization Seminar I

<p>【授業の目的】 この科目では、地域活性演習基礎で得た知識を基に、自ら選択したスポーツもしくは健康をキーワードとする地域活性化に関連する課題の解決を目指し、数名のチームでプロジェクトを遂行する。これらの過程を通して、プロジェクトの基礎知識（プロセスや問題解決手段）、プロジェクトの遂行に必要な行動・思考特性（特にチームワークやステークホルダーと合意しながらの作業）を修得する。さらに、第三者でも分かりやすい報告書の書き方およびプレゼンテーション能力を身につける。</p>			
<p>【学習到達目標】 ①プロジェクト活動について理解し、チームとしてプロジェクト計画を作成する立案力を身につける。 ②立案した計画に則して活動をし、一定の成果をまとめる実行力を身につける。 ③プロジェクト活動に参加することにより、チームで協力して設定した問題を解決し目標を達成していくコミュニケーション力を修得する。</p>			
<p>【授業計画】</p>			
	テーマ	内容・方法等	PDCA
1	オリエンテーション	本授業の内容説明	PLAN
2	先行調査	障がい者スポーツの歴史や現状を調査	
3	資料準備	障がい者スポーツの歴史や現状の発表資料作成	
4	調査の発表	障がい者スポーツへの関わり方を相互に学ぶ	
5	プロジェクト活動	プロジェクトの目的達成のための活動、進捗管理	DO
6	プロジェクト活動	プロジェクトの目的達成のための活動、進捗管理	
7	プロジェクト活動	プロジェクトの目的達成のための活動、進捗管理	
8	プロジェクト活動	プロジェクトの目的達成のための活動、進捗管理	
9	中間報告会	プロジェクトを体験した感想の報告	CHECK
10	プロジェクト活動	プロジェクトの内容に関するディスカッション	
11	プロジェクト活動	ディスカッションをもとに意見を集約	
12	プロジェクト活動	成果発表の準備	ACT
13	プロジェクト活動	成果発表の準備	
14	プロジェクト活動	最終成果発表の事前練習	
15	最終成果発表	しあわせ福井スポーツ協会のスタッフの方々に向けてプレゼンを行う。	
16	報告書の提出	最終成果発表の内容を報告書にまとめて提出	

3.3 確認期

確認期（CHECK）に該当したのは第9回から第11回であった。第9回の授業で、スポーツイベントの運営スタッフとして活動した感想を公表したのち、イベントの改善点についてブレインストーミングを用いてディスカッションを行った。学生たちが意見を出し尽くしたのち、KJ法を用いて意見の分類を行うことで問題点を明確化した（Fig.1）。この際、教員から学生たちに対して、「障がい者スポーツ大会におけるボランティアスタッフを増やすための方策について」というテーマを与え、問題点の整理を行った。教員は学生たちから意見を引き出すことや、意見を分類するための視点をアドバイスし、ファシリテーターとしての役割に努めた。

ディスカッションの結果、改善すべき問題点が、「競技進行の方法」、「競技を盛り上げるための運営方法」「大会の広報」、「会場設営」の4つに分類された。その後、これらの問題点に基づき、3名の受講者は個別にテーマを選定し、その解決策を考え発表資料の作成を行った。学生たちが選定したテーマは、「障がい者スポーツを盛り上げるための大会運営方法の提案」、「参加者の安全面を考慮した競技進行の方法」、「障がい者スポーツへの共感をテーマとした広報」の3つであった。

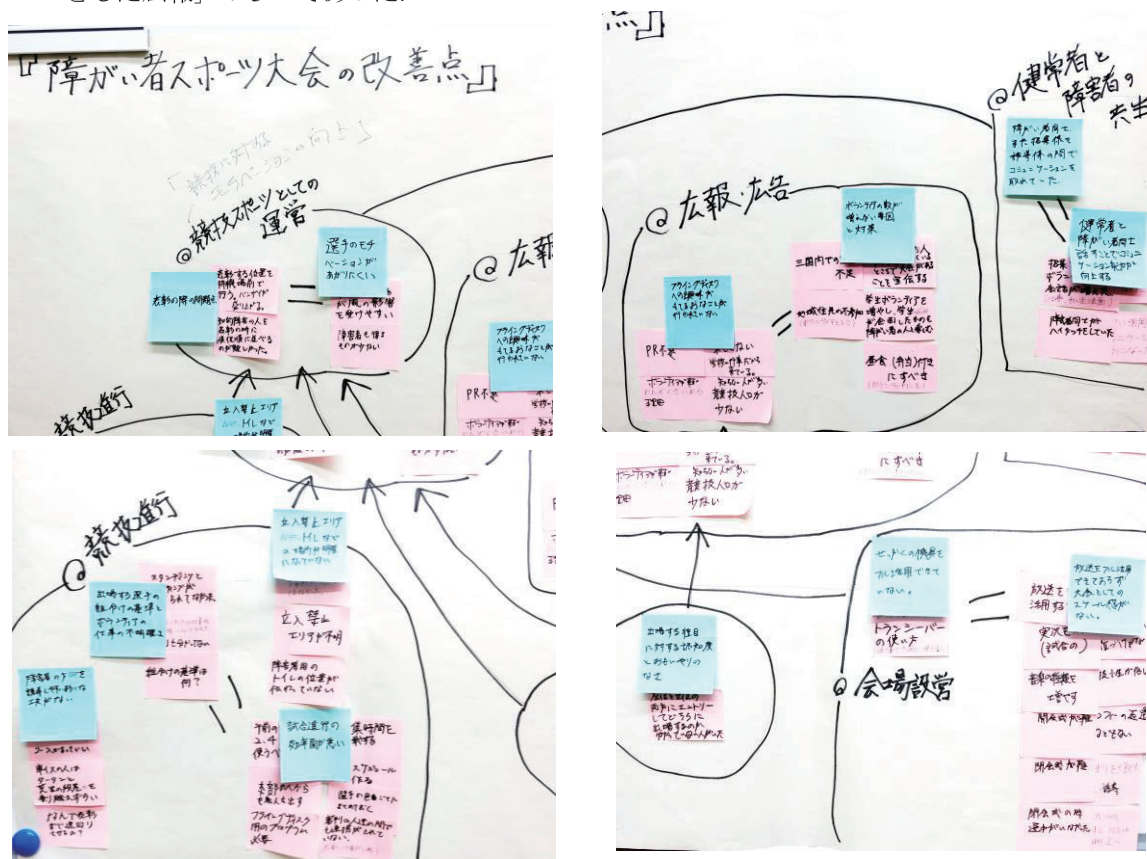


Fig.1 The results of discussion by the KJ method

3.4 見直し・改善期

見直し・改善期（ACT）に該当したのは第12回から第16回であった。ここでの最終目標は、障がい者スポーツ大会の主管を担当した「しあわせ福井スポーツ協会」の職員の方々へプレゼンテーションを行うことであった。当初は、地域活性演習Ⅰを担当している本学の教員に対して成果報告を行う予定であったが、プレゼン資料を作成する動機付けを高め、また実務を行っている方々から直接意見をもらうために、学外の方に向けて自らの意見を発表する機会を設定した。第12回から第13回の授業において、パワーポイントによるプレゼン資料の作成を行った（Fig.2）。第14回では成果発表の事前練習を行い、教員から発表内容や発表態度に関するフィードバックを行い、プレゼン資料の修正を行った。第15回では最終成果報告会を行った。報告会は8月2日（水）に、福井運動公園事務所にて行われた。この報告会には、「しあわせ福井スポーツ協会」の職員5名と本学教員2名が出席し、学生による成果報告のプレゼンと、成果報告に対する質疑応答およびディスカッションが行われた（Fig.3）。第16回目の授業では、教員から発表内容やこれまでの取り組みに関するフィードバックを行い、報告書の作成を実施した。

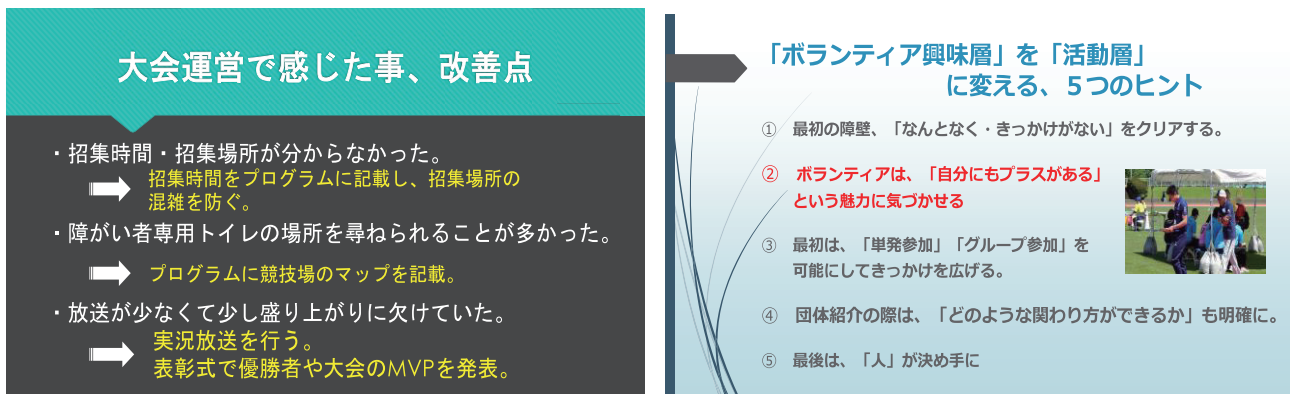


Fig.2 Materials for presentation



Fig.3 Presentation at office of "happy fukui sports association"

4. 成績評価の方法と教育の成果について

4.1 成績評価の方法について

Table 2 は、横谷ほか⁽²⁾と同様の PBL 型学習の報告書（成績評価表）を示している。報告書には、学生自身の自己評価内容と感想を確認する欄、教員による評価欄が設けられている。地域活性演習Ⅰの学習到達目標として掲げた項目は、「プロジェクト活動について理解し、チームとしてプロジェクト計画を作成する立案力を身につける」、「立案した計画に則して活動をし、一定の成果をまとめる実行力を身につける」、「プロジェクト活動に参加することにより、チームで協力して設定した問題を解決し目標を達成していくコミュニケーション力を修得する」の3つであった。したがって、これらの到達目標を踏まえ、「計画の達成度と計画達成のための努力」、「チーム内での役割意識と積極性」、「発表時の態度と質疑応答」、「レポート等報告書の構成と内容」の4つの項目の評価ポイントに関するルーブリックを作成し、学習到達目標を達成できているかを総合的に評価した。

PBL 型学習による学びは、従来のテスト法では可視化することが難しいため、知識構成の過程や能動的な学習によって身に付いたパフォーマンスを評価する方法の一つとして、ルーブリック評価が注目されている⁽⁴⁾。本授業では、上記4つの項目に関して S, A, B, C, D の5段階の評価基準によるルーブリックを作成し（Table3）、授業への取り組み状況、報告書の記述内容、プレゼン資料の内容、プレゼン時の態度から成績評価を行った。

Table 2 Grading system in Regional Revitalization Seminar I

平成__年度 地域活性演習 I 報告書

学年学科		学籍番号		氏 名	
指導 教員名		共同 研究者			
課題名					
自己評価内容				5	4
				3	2
				1	
				よくできた ← できなかった	
目的を理解し、課題に取り組むことができた					
課題遂行のための計画立案方法について理解できた					
資料の収集方法や課題遂行のためのスキルを身につけることができた					
チーム内での役割を意識し、取り組むことができた					
問題解決のために、計画を見直し、改善する努力をした					
計画通り、目的を達成できたと思うか					
本授業に参加した感想					
本授業で与えられた課題を遂行する上で、「身につけられたこと」、「得られたこと」などを踏まえ、具体的に感想を書くこと。					

以下、学生は記入しないこと

評価のポイント	秀	優	良	可	不	無
計画の達成度と計画達成のための努力						
チーム内での役割意識と積極性						
発表時の態度と質疑応答						
レポート等報告書の構成と内容						
総 合 成 績						
評 価 担 当	印					

Table 3 Rubric evaluation sheet in Regional Revitalization Seminar I

評価観点	S	A	B	C	D
①計画の達成度と計画達成のための努力	授業の活動には休まず参加するとともに、授業で達成すべき課題を理解して、具体的な改善策を提示できた。	授業の活動には休まず参加し、授業で達成すべき課題は理解しているが、具体的な改善策の提示が乏しかった。	授業の活動にはほぼ参加し、授業で達成すべき課題は理解しているが、具体的な改善策の提示がなかった。	授業の活動を度々欠席し、授業で達成すべき課題の理解が乏しく、具体的な改善策の提示がなかった。	遅刻や欠席が多く、授業で達成すべき課題を理解しようとする努力がみられなかった。
②チーム内での役割意識と積極性	ディスカッションを行う際に、自分自身の役割を認識し、積極的に意見を出し、周囲と意見交換を行い課題解決に至った。	ディスカッションを行う際に、自分自身の役割を認識し、積極的に意見を出し意見交換できた。	ディスカッションを行う際に、自分自身の役割の認識は乏しいが、自らの意見を出すことができていた。	ディスカッションを行う際に、自分自身の役割を認識せず、自ら発言することは少なかった。	ディスカッションを行う際に、自分自身の役割を認識せず、ほとんど話し合いに参加しなかった。
③成果発表時の態度と質疑応答	発表時に原稿を見ることなく、聴衆を見ながら話すことができるとともに、質疑応答に適切に答えていた。	発表時に原稿を見ることなく、聴衆を見ながら話すことができたが、質疑応答を適切に答えることができなかった。	発表時に原稿を時折見ながら話しており、質疑応答を適切に答えることができなかった。	発表時に原稿を見ながら話しており、質疑応答に答えることができなかった。	発表時に原稿を見ながら話すだけで、聴衆に伝えようとする努力が見られず、質疑応答に答えることができなかった。
④プレゼン資料・報告書の構成と内容	プレゼン資料は図やイラストを使用して見やすい工夫がされており、報告書には授業活動の概要、授業で身につけたこと、身につけたことを活かす方法が具体的に記述されていた。	プレゼン資料を見やすくする工夫がみられ、報告書には授業活動の概要、授業で身につけたことが具体的に記述されていた。	プレゼン資料を見やすくする工夫が不足らず、報告書には授業活動の概要、授業で身につけたことが記述されていた。	プレゼン資料の情報が過多または不足しており、報告書には授業活動の概要、授業で身につけたことが抽象的に記述されていた。	プレゼン資料の情報がまとまっておらず、報告書には授業で活動した事実、または受講した感想のみが記述されていた。

4.2 教育の成果について

報告書には「授業で与えられた課題を遂行する上で身につけられたこと、得られたこと」として、以下のような感想が記述されていた。「近年の障がい者スポーツは日本ではまだまだ知名度が低く、より多くの方に障がい者スポーツを知ってもらい、障がい者スポーツに関わる人々を増やす必要がある」、「学外の方と意見交換したことで、障がい者スポーツの現状をより深く理解でき、またプレゼンスキルを学ぶことができた」、「これまでパワーポイントを使用した発表の経験が少なかったため、写真の配置やレーザーポイントを使用した分かりやすいプレゼンの仕方を身につけられた」、「障がい者の目線で言動を考えたり、こういった場面で不自由なのかといったことを事前に考えることができるようになった」と述べられていた。これらの記述から、障がい者スポーツに関わるイベントを開催する上で必要な視点や、自分の意見を分かりやすく伝えるためのプレゼン技法を身につけることができたと推測される。特に学外の方に向けてプレゼンを行うという機会が、このような教育の成果に結びついていたと考えられる。

5. 今後の課題と結語

「地域における障がい者スポーツの振興」をテーマとした PBL 型授業によって、学生たちは障がい者スポーツの現状を肌で感じながらイベント運営上の改善点を理解し、学内の授業だけでは体験できなかったプレゼン技法を修得することができた。また、成果報告会終了後に、しあわせ福井スポーツ協会の方から、学生の発表内容に関する感想を送っていただいたところ、「大会のあり方をバリアフリーという『環境面』から、選手とボランティアの『交流』から、プログラムなどの『運営面』からと、様々な角度から貴重な意見をいただき、当協会にとって大変有意義なことでした」、「発表者の皆さん全員が高い意識を持っており、実に頼もしく感じた」、「発表された学生の意識が高く、障がい者スポーツやボランティアについてよく考えられており、実際に生の現場に赴いたからこそ感じる事ができたと思います」という講評をいただいた。このような前向きな感想をいただけた背景には、PBL 型授業という形態を利用し、学生たちが実際の障がい者スポーツの大会へスタッフとして参加できたことが大きく影響しており、PBL 型授業のテーマとして、「地域における障がい者スポーツの振興」を設定したことは一定の成果があったと推測される。

しかし、学習の到達目標の一つである「チームとしてプロジェクト計画を作成する立案力を身につける」に関する記述が、報告書にほとんどみられなかったことは本授業の課題である。この理由としては、平成 29 年度に地域活性演習Ⅰが初めて開講されたため、関連団体との事前調整が十分に行えず、既存の大会イベントに参加するという形式をとったことが影響していると考えられる。したがって、今後の課題としては、学生たちが主体的に、地域での障がい者スポーツ振興に繋がるスポーツイベントの立案に取り組める体制を整えていくことである。

また本報告では、教育成果を報告書における学生の記述から考察したが、教育成果を量的指標の変化からみた能力伸長⁶⁾で捉え、可視化することが必要であろう。これに関して坂井(2016)⁶⁾は、社会人基礎力と就業力尺度を用いて、授業開始時と授業終了時にアンケート調査を行い、「課題発見力」、「主体性」、「計画力」、「創造力」、「専門的資質能力」の得点が優位に上昇したことを報告している。このように PBL 型学習による学生の変化を定量化することは、授業内容を充実化するためにも重要な課題であろう。

謝 辞

本授業での取り組みに対して、しあわせ福井スポーツ協会の皆様から多大なるご支援をいただきましたことを、ここに感謝いたします。

文 献

- (1) 湯川恵子, 木村尚仁, 碓山恵子 “学びへのコミットメントを引き出す学習者主体のルーブリック作成と自己評価”, 国際経営フォーラム, Vol. 27, (2016), pp. 217-236.
- (2) 横谷智久, 野口雄慶, 吉村吉信, 加藤芳信, 栗本宣和, 野尻奈央子, 杉浦宏季, 戎利光 “地域のスポーツイベントを活用した PBL 型学習への取り組み”, 福井工業大学研究紀要, Vol. 47, (2017), pp. 349-354.

- (3) 土岐仁, “秋田大学におけるプロジェクト遂行型実践教育について”, 機械力学・計測制御講演論文集 2015, (2015), pp.239:1-239:6.
- (4) 松下慶太, 今西正和, “PBL 形式の演習科目におけるルーブリック評価の開発-学生の「振り返り」に着目した授業評価-”, 実践女子大学人間社会学部紀要 第 13 集, (2017), pp.93-109.
- (5) 坂井敬子, “自治体・地域事業所と連携した PBL 授業の実践報告: 学生の振り返りにみるチーム活動と学習プロセス”, 静岡大学教育研究 12, (2016), pp.71-79.

(平成 30 年 3 月 31 日受理)